

【目 的】北海道アイヌ住居は失われた民家である。本論は文献と復原住居をもとに白老地方の北海道アイヌ住居の開口部（入口、神窓、採光窓）の位置を編纂して開口部の位置の伝統と変革を導く。

【研究方法】本研究は江戸時代後期（18世紀末期～19世紀中期）と20世紀前期（明治30年頃～昭和20年頃）の白老地方の北海道アイヌ住居が記録されている11冊の文献と小林法道所蔵の復原建築の実測調査記録（白老地方の北海道アイヌ住居）（平成5年10月、小林法道調査、同者所蔵、調査回数：2回、調査戸数：4戸）をもとに研究する。開口部の位置は平面形の影響を受けるので本研究は白老地方の北海道アイヌ住居と復原住居の平面形を10種類に分類してから白老地方の北海道アイヌ住居と白老地方出身者が復原した復原住居の開口部の位置一覧表（29戸と12例）を作成して白老地方の北海道アイヌ住居の開口部の位置の伝統と変革を導く。

【結 果】18世紀末期から現代の復原住居まで白老地方の北海道アイヌ住居では入口を玄関の右側に設置する方法と入口を玄関の右側と主屋の右側奥に合計2つ設置する方法と神窓を主屋の奥側に設置する方法と採光窓を主屋の右側に1つか2つ設置する方法はほぼ継承されている。神窓は神への信仰心を維持するための窓なので住居の形態が変化しても継承されている可能性がある。一方、白老地方では住居の右側が南側になるように住居が配置されるので平面形が変化しても入口と採光窓を住居の右側に設置する方法は継承されている可能性が高い。また、20世紀前期の矩形平面系の住居では多少変化が生じている。